

## ■ 質疑応答・コメント

藤田 3つの地域からの報告がありましたが、事実確認、それから、パネリストの皆さんの間でお互いに質問がございましたら、どうぞ。

井村 先ほど言い足りないことが3点ほどありまして、補足させていただきます。学校に情報などを公開するときに、気をつけなければいけない点として、「ゆめの木教室」もそうですが、事前に入室時に保護者にはキチンと説明をするということです。学校と連絡を取り合ってるので、クラスのいろいろな情報を学校の方にもお伝えしますということ。また、個人懇談などで話し合ったことについても、ちょっとこれはというようなことに関しては、学校へお伝えしてもいいかどうか、確認を丁寧にやるのが保護者、子どもとの信頼関係の上で非常に重要だと思えます。

2点目は、今、私は午後は保見団地におりますが、午前中は週に2、3回ほど、豊田市の南地域の国際教室にいまして、2、3時間、中国の子どもたちなどの日本語を見ています。本当に今日のテーマだと思えますが、学校で取り出してやることの限界ということを強く感じています。何とか毎日、たとえ20分でも掛け算なら掛け算を繰り返し教えることができれば、もっと効果が上がるのにな、というのを常に感じています。

そして3点目ですが、基本的に日本人の子でも、国籍を問わず、どうしても学校に行けない子というのはやはりいると思います。そして、そのような子たちでも学べる場がこの社会には必要だということを私は思っています。

藤田 それでは会場からの質問を受けたいと思います。

質問者① 古賀さんに質問ですが、外国の方が寄ってこられたというのは、アラビア語が話せるとか、英語が話せるとか、何かご事情があたりだったのでしょうか。

古賀 英語がちょっと話せます。

### ◆ 学校にも行かない子どもへの対応は

質問者② 全員に質問したいのですが、不登校の問題やサポート教室に通わなくなる子どもたちに対する対策について、お聞かせいただきたいと思えます。

原 私たちのところはまだそんなに体制も整っていないので、対策というほどのものがあるわけではありません。夏ごろは結構みんな遊ぶようになって、学習サ

ポートにも来なくなりましたが、ひとつは保護者との関係です。保護者との関係は先ほども少しお話したように、フィリピンの子については、ローズマリーさんから連絡してもらって、いろいろな話をしています。中学校にも行けていない子がいるみたいですが、高校生のリーダーにそういう子たちを誘ってもらおうというような形でやっていきたいと思っています。

**古賀** 私たちが「よるとも会」を始める前に中学校で3人退学者が出ました。中学校は義務教育なので、退学というのはあり得るのかなと私はそのときに思ったのですが、聞いてみたら、ある年に家の事情で退学したという子が3人いました。その子たちのおうちの背景というのは、3人全員が中国帰国者の家族でした。家庭の事情で不登校になって、退学という流れがありました。フィリピンの子たちが地域では元気そうに歩いているのに、全然学校には行っていない。でも、なぜかそういう子たちは「よるとも会」のキッズルームには来て、遊んでいたりと、勉強したりしています。



**吉谷** 福岡市もものすごく問題があって、地域としてはちゃんと受け入れてくださったのですが、年齢が超えている子は学校側は、基本的には入れたくないと言うことで、うまくいかなかったケースがいくつかあります。ご本人たちもその後、働いていたり、働かなかったりという生活で、我々としても残念な思いもあります。

**井村** 「ゆめの木教室」としては、特に不登校の対策は取っておりません。ただ、日常的に学校に通えない状況が起きた場合は、家に電話したり、家庭訪問したり、そういうふうに対応すると思います。過去には実はありました。1年間不登校だった子が「ゆめの木教室」に来るということで、アパートから外に出て学習することになり、その後、中学にキチンと通えるようになって、卒業したという例はあります。そのほかには、週に2、3回休むという休みがちだった子が毎日キチンと宿題を提出したいという思いで、頻繁に休まずに通うことができるようになったケースもあります。

## ◆ 生きていく力をどうやってつけるか

質問者③ 秋田県の「のしろ日本語学習会」の北川裕子と申します。聞いていて思ったのですが、子どもは田舎なので、例えば、一人の人間として生きていく場合に、学校、福祉、教育委員会、それから、さまざまな部署との連携がなければ、人は生きていけないと私は思っています。一人の人間として見るならば、例えば、我々ボランティアだけでやっても、福祉と連携していなければ絶対にできません。子どもの場合に経済的な面で高校進学が難しいというと、奨学金を申請して、卒業後、就職してから毎月3,000円とか5,000円ずつ払っています。そういうことを教えるとか、そういう方法もあるよということをしらないのかというのがひとつ。

それから、子どもの問題で、乳幼児の場合に一番接点を持てるのは幼児の保育所ですが、そこと連携しようとは思わないのかということ。それから、不登校の場合に、日本の中で不登校になると、例えば、就職の問題やいろいろな問題でさまざまなデメリットがあるという話し合いはしないのでしょうか。選ぶのは最終的には本人ですが、途中でやめた場合に、どういうデメリットがあるとか、やめるにしても、こういうことをして力をつけなければ自分で生きていけないという、一人の人間として生きていくための方法を一方通行に押し付けるのではなくて、選んだ場合にこういう生き方もあるんだよという勉強会みたいなものはしたことがないのかなと思いました。

最後に、原さんと笹尾さんの話を聞いて思ったことですが、私のところでは、高校にみんな入って、1人もやめていません。その一番の理由は、卒業した人が会社の中でまじめにやっているという見本が何人かいて、僕もあんなふうになりたい、私もあんなふうになりたいと。高校を中退したら、できなくなってしまうよ、頑張ろうよというようなシステムをもう少し教室側でつくっていく。要するに、日本語を教えるとか足りないものを教えるだけではなくて、人として生きていくために必要なことを教えることが必要ではないのかなと、思いました。

井村 奨学金ですね。今、ちょうど「ゆめの木教室」を立ち上げのときからの子たちがやっと中学になってきて、本当にこれからこの情報を集めてやっていかなければいけないなと思っております。まだ始まって年月が短いものですから、今は具体的にはまだです。ただ、実際に日本の大学へ行くとしたらとか、高校に行くとしたらとか、具体的な費用、交通費や入学金も含めて、そういうアナウンスは交流会で毎年やっております。

あと、幼稚園、保育園の連携に関しては、まだできていません。でも、小さい



ときからのことが本当に重要なのは分かっておりまして、保見団地の中で今、4つのNPO法人があるのですが、そのNPO法人以外にも幼児の日本語教育、日本の学校へ行く子で日本の幼稚園に行っていない子のグループがありまして、その代表の方やスタッフが「ゆめの木教室」も手伝ってくれております。そういう人たちからの情報で、乳幼児期に日本語もポルトガル語も入っていない、基本語彙が入っていないという状況で学校に入らなければいけなくなっていることを詳しく知ることができて、とても問題だと思っております。ただ、「子どもの国」では今は手いっぱいなかなか具体的な対応ができずしております。不登校に関しては、先ほどお話をさせていただきました。

**古賀** 保育所などについてですが、私は息子が保育園に通っていましたが、個人的につながったりしていたときもありましたが、北川さんがおっしゃるように私も疑問がいっぱいありました。何でそういうものがないのか。というのは、一人の人間が生きていくためには学校にも行かなければいけないし、買い物にもお医者さんにも行かなければいけない。いろいろなところに行かなければいけないのに、どこに行っても言葉が通じない人たちがいっぱいいることに関して、誰も何かをするわけでもないことにすごく疑問を持っていました。個人的にはそうやって保育園や小学校とかかわっていこうという努力をしていたのですが、今では香椎浜の校区内にある保育園に関しては、人尊協という形でつながっていて、

問題などを話し合ったりはしています。小学校に関して言えば、「フレンズ会」が中心となって、例えば、中学へ行くときの説明会や入学式の説明会など、プレススクールみたいな形のことも行っています。でも、「フレンズ会」というのはPTAの保護者の会で、そういった就学时児童援助金などの説明会をするような立場ではないと思います。個人情報など保護者同士で知ってはならないようなことも知り得たりしますから。だから、本当はそういった公共の機関が必要だろうとは思いますが、今のところは「フレンズ会」で年間の行事も含めての説明会を行っています。高校に関しては、「ともいき」が行っているので吉谷先生お願いします。

吉谷 私が代表している「ともに生きる街ふくおかの会」が、日本語を母語としていない子どもたちのために進路ガイダンスというのを毎年、夏に1回やっています。そこで外国の方でも奨学金を受けられるということも含めて、日本の学校システムなども含めた進路ガイダンスを福岡で立ち上げてやっています。毎年やりながら、教育委員会も入ってくれて、名義後援はしてくれるのですが、それ以上は全然手を出さないで、それでいいんですかということをしつこく言い続けている状況です。実は「ともいき」というのは、緩いネットワーク、勉強会と言いましたが、そのメンバーというのは、例えば、我々みたいに日本語の学習室みたいなことをやっているメンバーもいるし、教員組合の人もあるし、国際交流協会の人もいるし、JICAの人もいるし、あと、さまざまな地域で、外国人サポートなどにかかわっている人たちが会員として名前を連ねていて、その場を利用して、さまざまな課題を解決していくという形を、非常に緩い形でやっています。つまり、子どもさんの問題でこんなことがあるというのは、そのメンバーや



来ている団体の方から情報が入ってきて、それだったら、この人を紹介しましょうみたいな、そういう場所になっています。「よるとも会」そのものはそこまでの広がりをするすぐにできるわけではないので、「ともいき」と連携しながら、全体的な情報を収集したり、今みたいなことをやったりしているというのが背景にあって、動いているとい

うことです。

もうひとつ、不登校の問題ですが、実は先ほども少し紹介がありました、「よるとも会」で勉強している子どもたち、先ほど全然学校に行かないという、そういう子どもたちは九州大学の学生や福岡教育大学の学生、地域の大学の学生たちもそこに一緒に存在します。それから、帰国者で大学まで行ってと



いう人もいますので、ある種のそこで出会ったロールモデル、自分も将来、ひょっとしたらこんなふうになれるんだというのを見る場所になっています。また、帰国者として来られたのですが、今は日本語が上手になって、逆にその人がサポーターとして入ってくることによって、そこでまた将来が開けるとか。だから、まさに出会いの場を一番大事にしてやっているの、意識的に不登校対策としては必ずしもやっているわけではない。

原 「ふれあい館」を運営している青丘社の関連事業で桜本保育園という保育園があります。保育園も多文化共生保育を進めています。もともと在日韓国・朝鮮人の取り組みからでしたが、今はニューカマーの子どもたちも多数入っています。また、「ふれあい館」のある桜本中学校区が人権教育のモデル事業ということで、ずっといろいろな取り組みが行われてきました。ただ、ひとつの課題は、ニューカマーの子どもたちは、川崎区全域に多住しています。ひとつの学校だけにもものすごく多いわけではなくて、今まで「ふれあい館」が主にやっていた地域よりももう少し区全体という課題になってきている。ニューカマーの子どもたちをどうやって受け止めていくかということは、まさにこれからの課題です。

奨学金のことは、奨学金制度ももちろんあります。フィリピンの子で来年私たちのサポートで受験する子たちが5人います。フィリピンの子たちは小学校3年生で来たけど、1回帰って、また来た子とか、あるいは中学校1、2年生で来た子とか、中3になって来た子などさまざまあります。そもそも昼間の高校で進路を選択して、学力的に入れるかどうかということが一番大きな壁になっています。学校では全く日本語が分からない子どもが入った場合に、半年から1年ぐらい日本語指導等協力者から日本語とさまざまな学習のサポートを受けられますが、こ



の制度は1年ぐらいで終わってしまいます。その後のサポートをどういうふうにするかが私たちの大きな課題で、ずっと総合教育センターの佐藤公孝先生とも話し合っています。

当然、私は地域のサポートだけでこの課題を解決できるとは思ってなくて、学校と地域とが連携するということでない、子どもたちが高校に入れないということがあるかなと思います。もちろん定時制高校という選択はありますが、定時制高校に入ったとしても続かないという問題があります。全体的に神奈川ではそれなりに進路ガイダンスとかは進んでいると思いますが、それは笹尾さんの方から説明していただきます。

**笹尾** これは日本人の子も含めまして、私の勤めている高校とか、入るのが難しい学校全般に当てはまると思いますが、子どもたちのさまざまな経済的な背景も含めて、やめる子が実際にたくさんいます。私が担任した子の中にもいます。その子たちへの指導が不十分な部分は日々感じておりますので、課題だと思っています。外国人の子どもたちの高校進学に関しましては、今、お話に出ましたように、神奈川県では高校進学ガイダンスというのを夏が終わってからやっております。その中で外国の子どもたちの高校進学に関するさまざまな相談を、学習支



援をするグループが集まって、県と共同事業として行っております。そういう意味でも、いろいろな方とネットワークを組んでやっていかなければならないのだろうということを感じております。

#### ◆ 障害がある外国につながる子どもをどう支援するか

**質問者④** 群馬県の大泉町立西小学校で日本語学級を担当しています。私が最近考えているのは、まず、最近の傾向としては、幼児教育がなされていない子どもが編入してくること。あとは、日本人の場合は特別支援学級というのがありますが、外国籍の場合の特別支援学級が存在しないということです。私どもでこのところ全員に検査をしまして、3人ほどボーダーレスの子どもが発見されました。それをどういうふうに対応したらいいのかというのが分からないので、お知恵を拝借したいと思います。

**井村** 以前の話ですが、「そら」の活動でフィリピンの男の子で外国籍であるために見過ごしてしまったことがあります。日本語ができないから、学習ができないというふうに周りも学校も、また「子どもの国」でもずっとそう思ってやってきたのですが、中学2年になって、ちょっとおかしいのではないかとということで、きちんと専門的な検査を受けて、発達障害と診断されました。外国籍であると見逃してしまうケースが多くて、すごく残念に思っています。実際、もう少し早い段階でそれが分かっていたら、もっと違う支援の仕方が当然あったと思います。それ以降、「子どもの国」では、スタッフの中に発達障害を専門にしている臨床心理士がいますので、06年、スタッフ研修として、発達障害についての話をしてもらいました。その中で外国籍であるために言葉が分からないからという形で見逃してしまうことがないための予防策として、現在は発達障害のスタッフ研修をしております。

**藤田** 会場におられる川崎市の総合教育センターの佐藤公孝さん、こういった事例をご存じでしたら、お答えいただけますか。

**佐藤公孝** 神奈川県では「支援教育」ということで外国につながる子どもたちもその支援の教育に入れていこうという考えを持っています。川崎市も08年度、正式に「支援教育」という枠組みの中で、いわゆる特別支援、障害のある子や不登校の子などを含めて、外国の子たちも支援をしていくという考えに立っています。

先ほどの話にもかかわるのですが、確かにそういう子はたくさん出てきています。センターでは日本語指導が始まったときに、この子は言葉の問題なのか、そ



れとも異文化間の問題なのか、障害の問題なのかというところを早い段階で、緩いネットワークの中で誰かが気がつくということが一番大切だと思います。あとは学校の中でも緩やかな支援の方法をコーディネーターを中心にやっていただくということが僕は必要だと思います。この子はADだから特別支援だとか、そういう人を枠組みでとらえるということはこれからは通用しないと思います。そういうことではなくて、今あるリソースの中で何ができるのかというところを考えていくことがこれからの学校の在り方ではないかなと感じています。

僕は地方だろうが、都会だろうが、どういう形のネットワークでも誰かが気がついて、それを誰かに伝えるということが今、学校でもすごく求められていると思います。そこを逃してしまう学校があれば、後で大きな問題になります。それは地域でも同じだと思うので、そういう視点で今ある学校の特別支援、それから、スクールカウンセラーや日本語指導等協力者、教育相談の方、いろいろな方が今、入っています。そのときに学校がどうかかわってコーディネートしていくのか。その時間をどう大切にするかということで、学校の体制が変わるのではないかと思いますので、まずそんな視点で見直していただけないかと思っています。

当然、多言語の問題や誰がそういう臨床の場面でかかわるのかなど、いろいろな問題が出てきます。ただ、そこを問題ととらえてしまったら、次へは進めません。そのときに誰かに入ってもらおうということを緩いネットワークの中で探していく。そうした方が子どもたちが次へ進めると僕自身は感じています。

## ■ 「ニューカマーの子に自らの経験を重ねる」

**藤田** 最後にコメンテーターからのコメントの時間に充てさせていただきたいと思います。それでは東京外国語大学特任研究員で、「川崎市ふれあい館」の金迅野さん、お願いします。

**金 迅野** コメンテーターとして何でここにいるのだろうと思っています。とても似合わないと思っ自分では思っています。これだけの方々のお話を聞いて、後にコメントするというのはこれもまた似合わないと感じていて、それよりは感じたこと湧き出たことを申し上げようと思います。

先ほど原さんがK君の話をしました。自分の後輩たちに英語で日本語を教えるときに、「彼女はいるのか」の話のように、そういうことをまず教える。常識から少しズレてしまうというか、普通の教室から見ると、少し異形とでも言うの



金 迅野

でしょうか。「変な感じ」と思われるかもしれないようなものを、実は、僕も持っているのではないかと、どこかでずっと感じてきた。そういうことを話そうと思います。壇上にこれだけの人がいて外国人は僕だけだから、そういう話をしてもいいかなと思いますので。

僕是在日コリアンの3世ですが、僕が小さいころは、こんなふういろいろな人が集まって外国人のことを「ああでもない、こうでもない」と議論するという雰囲気はなかった。コリアンと今のニューカマーの子たちの状況は必ずしもイコールではないですが、例えば、僕は朝鮮学校に行っていたのですが、中学3年になったときに、強面の同級生や企みをいつも持っているようなやつらが集まって、「これからどうするんだ!？」みたいな話をしました。いだしっぺは見事にヤクザになりましたが、その当時、僕たちが与えられていると感じていた選択肢というのはだいたいこんな感じでした。ヤクザでしょう、あとはホストでしょう、パチンコ屋さん、板金なんかも含めた土建業でしょう。民族団体の職員、これは一番イケていない感じで、勉強はできるけれども、頭の悪いやつがここに行くみたいに観念していました。あとは学者。なぜか医者、弁護士という選択肢も極値としてありました。一発逆転作戦です。「どれをやるんだ、お前は」と問われた僕は、「何でお前に問い詰められなければいけないんだ?」と思いながら、「天文学をやる」と言ったんですね。そうしたら「テン・モン・ガク?????」と言われて……。なぜ、天文学に僕が最初に興味を持ったかという、それは、いろいろな人からのいろいろな影響を受けていたからなんです。もちろん、それは実現されなかったからここにいるのですが、言いたいことは、総じてマイノリティーの子どもたちの選択肢は狭いということです。

ヤクザから医者までという幅は表面上は広いようですが、現実の可能性としては、つまり少年たちの現実感としてはそんなに広くありません。だから、狭い分、その中でものすごくブレるわけです。極端にブレる。一生懸命やると言って医者を目指していたかと思ったら、ヤクザになるとか。そういう激しさみたいなものがあって、高校に入ったけれども、ドロップアウトしてしまうとか、ちょっとしたきっかけでひっくり返ってしまうみたいな感覚は僕の中にもありました。何で僕がここにいられるのかと言ったら、もちろん原さんがおっしゃった民族リーダー、僕はあまりそういう言葉は使いませんが、例えば、姜尚中さんみたいな先輩がいるとか、もっと身近にあなどれない焼き肉屋のおじさんがいるとか、そうい

う人たちの存在はありました。しかし、同時に、それとは別の、例えば、僕は高校から日本の学校に行きましたが、高校、大学と節目節目で、本当に蕩尽としか言いようがない、すべてをなげうって何で僕なんかにこんなことをしてくださるんだろうと思う方々に巡り合いました。ラッキーとしか言いようがないのですが、そういう方々の営みに救われたと正直思っています。本当にそうです。ほとんどの方々が今はこの世にいらっしやらないので、思い出すと声が震えてしまうぐらいにその方々からはいろいろなものをいただきました。

たぶんK君も原さんや古賀さんがおっしゃったように、「今日は時間がないから帰る」などと言えるような感じではない現状、時間の流れの中での受け止め方、つまり、「受け止める」というよりも「事柄の方があっちからやってきちゃう」ようなことを、日々積み重ねながら、何かその子の進路を切り開いているというような営み。今日のお話の中には、ここでは語られなかった目に見えない営みがいっぱい埋め込まれていると思いました。決してニューカマーの人と僕を同一視するつもりはありませんが、K君は「あのときの私だ」と、先ほど突然思えてしまったので、そんなコメントをすることになってしまいました。ご容赦いただきたいと思います。

## ■「何ができるか、問われている主体的かかわり」

佐藤郡衛 金さんが思いを語ってくれたので、最後はまとめをしなければいけないのかもしれませんが、まとめというよりも考えていることを話します。この協働実践研究では、「佐藤・金班」という名前が付けられています。最初にこのプ



佐藤郡衛

ロジェクトを受けたときに研究の在り方そのものが問われるように感じました。自分にいったい何ができるのかということ。今日、根岸さんからもお話がありましたが、抽象論や一般化した議論はやめて、ひとつの地域の中でいったい何ができるのか。また、自分ができないことを他の人の助けを借りてやっていくことをみんなで考えてみようということ。す。

川崎市に即して言えば、私に何ができて、どういう人の力を借りれば、何ができるようになるのかを考えてみたいということ。今、「ふれあい館」で、総合教育センターの佐

藤公孝さんも巻き込みながら、いろいろなことをやり始めています。ただ、実際のところ、東大の全体のプロジェクトが大ごとになってきて、何かやらなければいけない、まとめをしなければいけないという話になってきています。しかし、最終的に私たちがやりたいことは実際に川崎市の中でどのような支援の連携をつくることのできるの



かということです。その上で、それはいったい、なぜだったのか、なぜそういうことができるのかということ、跡付けでもいいから検証しようということ、

今考えていることは、個人の力ではできないことも、いろいろな形で組織をつくっていくということで、できるようになるのではないかと。また、もうひとつは、制度化することで、予算措置もできるので、何か活動をしていくときには制度化が必要であり、そのためにはどのような戦略が必要かということです。こうした点を今後考えていきたいと思っています。今日の井村さんの話からも非常によく分かりますし、原さんの話にも古賀さんの話の中にも出てきましたが、固有名詞が出てこないで連携できないように思います。これまで、連携というとなにか語り尽くされて、言い古されているように感じますし、実際連携がとれていません。個人の固有名詞が出てきたときに、どうつながっていくのかということが実感をもって分かるように思います。そう考えたときに、川崎市で何かを考えていくときにも固有名詞の連携が必要ですし、さらに、子どもたちの問題を具体的にどう解決できるのかということ、どうつながるということ、積み上げていく中で、全体としての連携も出来上がっていくのではないかと考えています。

最後にもう一言。それぞれの地域には地域なりの連携の在り方があって、そこから一般化することもできないということです。それから、全体のテーマにもつながりますが、井村さんや古賀さんや原さんなどの取り組みの中に、コーディネーターについて考えるヒントがたくさんあるように思います。ただ、その際、個別の文脈に即して考えていければいいかなと思っています。まだまだこの「佐藤・金班」のところは中間報告ですが、これから川崎の中でどういうネットワークができていくのか。学校と地域が敵対することではなく、どう手を携えていく

のか。そのためにどういう戦略が必要なのか。その戦略を少し考えながら、実践を積み重ね、また皆さんの前で報告できるようにしていきたいと思います。

**藤田** 時間の都合上、大変申し訳ありませんが、この辺で質問の受け付けを終了させていただきます。最後に、パネリストの皆さんに一言ずつ話していただいて、会を閉めたいと思います。

**井村** 今日来て、今、組織が置かれている状況というものを改めて見つめることができました。豊田市・保見団地での活動は、豊田市国際交流協会、豊田市役所、豊田市教育委員会、学校、ハローワーク、児童相談所、保護司の方、企業の方々とか本当に多くの人のお力をお借りして、今もやっています。そして、先ほど質問をいただいたように、幼稚園児とか、まだまだこれからつながっていかねばいけないことに改めて気づかせていただきました。

**古賀** 私が香椎浜に14年前に来たとき、多くの外国から来たお友達がいたのですが、すごく孤独で、誰にも分かってもらえないと思いながら生活していました。何をすればいいのか分からなかったし、本当に孤独でした。だけど、今ではこの「よるとも会」や「フレンズ会」など、たくさんの団体ができてきて、そういったことを理解してくれる人たちも増えて、外国の方たちだけではなく、私も今はすごく恵まれているなという感じで楽しくやっています。これからもそういうふうに取り組めばいいなと思っています。



**吉谷** 大学の帰り、よく「よるとも会」に行きますが、僕自身はそこに住んでいませんが、一番安心する場所となっています。僕自身がスタッフやメンバーの1人として居る場所になっていて、最初に始めたときはきつかったのですが、今はすごく気楽に行かれるし、いろいろな問題が発生して、それなりにワーワーやっているのですが、楽しい場所というか、安心する場所になっていると思います。こういう場所を意図してつくれるわけではないですが、そういう場所になっているということも少なくとも古賀さんが言うように、どういうふうにしたら壊さないでこのままいけるのかということと、それに伴う課題はいっぱいありますが、それもあまり無理して、いついつまでにこの問題を解決しなければいけないという感じではやらないだろうと思っています。少しずついろいろなことを考えながら、やりましょうというふうにしていききたいと思っています。古賀さんも含めて、今、地域のお母さんたちが何人か中心メンバーにいますが、それが心強いです。

**笹尾** 今日は参加させていただいて、いろいろな方のお話をうかがって、本当によかったと思います。自分自身ボランティアを通じて、子どもたちやいろいろな方とつながれたらと思っていますので、こういう形で皆さんとお会いできてよかったと思います。

**原** 今日は先進事例を学ばせていただいて、本当によかったと思います。限られた時間なので先ほどお話できなかったのですが、この協働実践研究のテーマにのせていただいた中で、本当に連携が少しずつ見えてきたかなということがあります。地元で中学で外国籍の子が多い学校に日本語学級が新しくできたりしているのですが、そこの日本語指導等協力者とは、少しずつ連携が始まっています。私たちのところは保護者が来てから、学習サポートを受け入れることになっているのですが、何回電話してもお母さんが出ないとか、やはり夜働いている方もいらっしやったりします。そういう厳しい現状の中で、日本語の先生たちはよく親御さんと連絡をとっています。

この前もあるお母さんと日本語指導の先生が来てくれました。中学2年生のダブル国籍のフィリピンの子どもの学習について話し合おうという集まりだったのですが、実は、そのフィリピンの子にお姉さんがもう1人いて、その子の高校入学を考えたいと。その子はもう工場で働いているのですが、その子が新たに来たので、その日本語指導の人もとてもビックリしたのですが、その日の話はそのお姉ちゃんの進学問題になってしまいました。来週、いろいろな学校説明会が始まっていくのですが、その子は海外から来たばかりなので特別な手続きが必要で、



その手続きについてはその日本語指導者がやってくれることになりました。このように最近、フィリピンの子が次々と現れて、正直言って、手が回らなくて、頭もパニックになってしまうときがあります。一緒に具体的に進める人たちが増えていかないとできません。私たちのところには、例えば、ローズマリーさんという民族リーダーがいますが、実際に全部の説明会に通訳として行くことはできません。そういった意味では、せっかく、協働実践研究の対象になりましたので、この連携の作業が進んでいって、何か成果というか、発表ができるようになるのではないかととても大きな希望を持っています。

**藤田** 時間を大幅にオーバーしてしまいまして、申し訳ございません。こういう場合は、司会者は、禁欲的でなければいけないのですが、最後に一言だけ話をさせてください。

今までの話を聞く中で思うのですが、次の選択肢が広がる、選べる幸せというのがあると思います。それしかない、これを選ばざるを得ないというのではなくて、選べること、悩めることは幸せだと思える、こういったサポートができればいいな、とお話を聞いていて思いました。長時間、ありがとうございました。

